

中高ドイツ語における心態詞としての **doch** について  
**Doch als Abtönungspartikel im Mittelhochdeutschen**

石井 正人  
Masato ISHII

1.

心態詞がドイツ文法研究で関心を集め始めたのは 20 世紀の後半からであったが、未だに文法書においても辞書においても安定した記述方法が開発されたようには見えない。Abtönungspartikel「ニュアンス小辞」という通説の概念で捉えようとしたとして、その「ニュアンス」Abtönung なるものを辞書的・分析的に記述しようとして追いかけるときりがないうように思える。心態詞はそもそも、発信しようとする「内容」よりは、発信者とコミュニケーション「場」との関係、あるいは発信者と受信者の関係を表すためのツールであるようだから、普通の語彙の意味用法を記述する場合と大きく方法が異なる。本論がそこへ新たな理論的可能性を提案しようとするものではないが、心態詞がコミュニケーション「場」への直接指示を主要な機能とするなら、語彙の「叙述」Darstellung 機能ではなく、「表出」Ausdruck 機能や「呼びかけ」Appell 機能を辞書的に記述する「統一規格」が求められているとは考える。

「ニュアンス」Abtönung の記述がなぜ難しいかということ、もちろん揺れ動くからで、「場」の表現要求に応じて可塑性があるからだろう。たとえば **aber** において、接続詞としての「逆接」という意味が、心態詞としての **aber** の「驚き」や「非難」の意味を表すようになっていく過程は想像しやすい。それでは異なる言語文化から見て、「想像しにくい」意味の発展過程があるだろうか。それが心態詞を記述する上での一つのポイントになるだろう。もう一つは、通時的な発展である。心態詞の意味用法の発展は、歴史的にどう現れたのだろうか。経験的に前近代のドイツ語にも心態詞が存在していたことは知られているが、その使用頻度が現代ドイツ語よりも少なかったように思われる。ほとんどが **doch** で、**aber** と **ja** が少数ある。歴史的に心態詞というドイツ語独特のツールが発展してきたプロセスも、心態詞を理解する上で重要であろう。

本稿は心態詞の歴史的な位置づけについて一考察を試みる。注目したいのは、現代ドイツ語と中高ドイツ語との間の、心態詞の使用方法の差異である。手がかりになるのは、中高ドイツ語テキストの現代ドイツ語訳である。

ただ、資料として使用する現代ドイツ語訳については、一言述べておきたい。

20 世紀の半ばくらいまで、韻文作品の現代ドイツ語「翻訳」には、独特の強固な伝統があった。中高ドイツ語作品の現代ドイツ語訳であれ、英語やフランス語からの翻訳であれ、ラテン語や古代ギリシャ語からの翻訳であれ、詩形を原テキストと一致させた「翻訳」テキストを作ることを至上命令としていた感がある。文法構造や語彙の意味の正確な翻訳は犠牲にされていたと言って良く、一読してなぜそのような「翻訳」になるのか理解することの

方が、原文を理解するより難しかったことが往々にしてあった。Übersetzung という語を使いたがらず、Übertragung とか、はては Nacherzählung という語を使ったりしていた。スコ-pos や間テキストやアダプテーションの研究が進む前の時代のことである。「翻訳」という作業を学問的価値のないワンランク下のものと見なす一方で、「翻訳」するとなると、ドイツ文学研究史の創生期を飾った研究者兼ロマン派の詩人たちの訳業の向こうを張らねばならないという意識があったのではないかと邪推すらしたものだ。20 世紀末から今世紀にかけてそのような詩人を気取った「翻訳」はなくなった。

なぜこのような翻訳小史に触れたかと言えば、20 世紀末から今世紀にかけて出された現代ドイツ語訳は、それ以前の「翻訳」のように、無理に韻律を原テキストに合わせようとしていないから、原テキストと意味上対応する現代ドイツ語のテキストとして、その「自然なあり方」に信頼が置けるということを確認したかったのである。古い「翻訳」では、無理に韻律を原テキストに合わせようとして、特に「律」をそろえるために、構文に本質的な影響を与えない小辞（まさに Partikel）を、都合良く入れた形跡がある。心態詞の問題を考察する資料としては大きな問題を抱えていると言わざるを得ない。

こうして本稿が対象とするのは、Friedrich Ranke が校訂したゴットフリート・フォン・シュトラスブルク『トリスタン』Gottfried von Straßburg: *Tristan* のテキストに、Rüdiger Krohn が付けた現代ドイツ語訳である。特に用例が多く見られる doch を中心に考察していく。

## 2.

忠実な侍女のブランゲーネ Brangäne に初夜の身代わりをさせたイゾルデ Îsôt が、今度はブランゲーネが裏切るのではないかと疑心暗鬼に駆られ、部下の男二人にブランゲーネを森に連れ出して殺してしまえと命ずるが、男たちはブランゲーネを哀れんで殺すことができない。イゾルデの気持ちも変わるかもしれないと読んだのか、ブランゲーネを安全な場所に待機させると、男たちはご命令通りブランゲーネを殺して参りましたとイゾルデに報告する。すると案の定イゾルデは逆上し、私はそんなことを命じた覚えはない、と罵り始める。そこで男たちが言った言葉が次の通り。左が原文で、右が現代ドイツ語訳（以下同）である：

### 【例 1】

12892

Ir habet uns *doch* mit maneger nôt  
ervlehet unde benoetet,  
daz wir si haben ertoetet.

Ihr selbst habt *doch* inständig  
angefleht und genötigt,  
daß wir sie umbringen sollten.

あなた様が私たちに切々と  
頼み込み、強要したのではありませんか、  
彼女を殺せと。

この **doch** は現代ドイツ語の **doch** と似た意味用法で使われている。現代ドイツ語の **doch** は、コミュニケーション相手の「反論」や「否定」を予め想定した上で、確認・驚き・抗議の気持ちを込めて自分の「肯定」の内容を主張する。この点で強い肯定を表す **doch** は、**ja** との間にニュアンスの相違を持っている。このような **ja** との関係（肯定疑問文に対する肯定の応答には **ja** を、否定疑問文に対する肯定の応答には **doch** を、という明快な役割分担）が中高ドイツ語にはまだ存在しない。

**Doch** は、**da-** + **auch** が語源で、**da** は指示代名詞 **da-** の、恐らく位格か具格の副詞的用法で、それに追加・付加の副詞 **auch** が付着して成立したと考えられている。それなので、ベネッケ・ミュラー・ツァルンケの『中高ドイツ語辞典』では、**doch** を「代名副詞 **Pronominaladverb**」(**darauf, davon** の類い) と規定している。その原義において **doch** は、「その場合には～も成り立つ」という意味になるが、敢えてそのような付加情報を主張することには、それ相応の特別な意図があり、「しかし、こちらも成立するではないか」と、対立・矛盾・否定の内容をぶつけていくのが自然な流れだったのだろう。そこから逆接の意味が生まれたようである。現代ドイツ語の **dabei** が逆接の意味を含むのと同じ意味の発展プロセスであろう。

中高ドイツ語の **doch** は、むしろ現代ドイツ語の **dennoch** や **jedoch** の意味を表していた。現代ドイツ語でも **aber, allein, doch, jedoch** といった逆接の接続詞・副詞の使い分けは厄介な問題で、統語的な規則以外の決め手はなかなか見つからない。それぞれ歴史的成立事情の異なる語彙が、同じような逆接の意味に流れ込んできている。中高ドイツ語でもその複雑な事情は変わらないように見える。ただ、**ja** との対立がまだない。そこで現代ドイツ語の **doch** との間に、ニュアンスの違いが生ずる。



この doch が、18 世紀頃から、ja と同じように独立して「肯定」を表す副詞として使われるようになったらしい、という記載が Grimm の辞典にある。

さらに同箇所でも Grimm は、Georg Henisch (1549-1618) の *Teütsche Sprach und Weißheit: Thesaurus linguae et sapientiae Germanicae* (1616) において doch が、ラテン語の *sodes* (wenn es gefällig ist), *obsecro* (um Himmels willen), *age* (wohlan) として説明されている (sp.720) ことを、例によってコメント抜きで紹介している。17 世紀の早い段階ですでに、この辞書にあるように普通の逆接 *sed*, *verum*, *attamen* として意味を記述するのと並べて、コミュニケーション「場」に関わる意味をも並べて (しかも普通の逆接の意味より前に) 記述してあることは注目に値する。

**Doch/allein/erstlich/Saltam, tandem, veruntamen, denique, tamen, atqui. Tandem saepe vim habet non temporis sed instandi vehementius. Atqui pro & tamen.**  
**¶ Doch/loides, obsecro, age.** ←  
**¶ Doch/sed, verum, attamen.**

**Sie solten entweder sterben / oder aber / wo nicht in besser/doch/allein / zum wenigsten in etlicher hoffnung leben / cum spe, si non optima, at aliqua tamen vivere, lib. 9. epist. 6.**

**Was ist doch das für ein rühm vnd eh: suchst? Quorsum tamen, aut cur ista quaeris? Cic. de leg.**

**¶ Ich thu doch nicht so gewaltich/so vdel/Als ne laui atopere, vel, obsecro ne laui.**

**Warumb doch i quamobrem tandem.**

**¶ Doch so fern/das ich/doch vorbehalten/das/te. Quod potero faciam, tamen ut pietatem colam. Ter.**

**¶ Jedoch so fern/das/te. si tamen, Plin. Iun.**

**¶ Jedoch/das/te. tu tamen idem has nuptias perge facere, ut facis, Ter.**

**Co m p. Aberdoch/sed tamen, attamen.**

**30. Ist ein sprichwörtlein / so in vilen hendeln gang gemein/als. Ich glaub das dir ein ernst sey/aber doch wenn jemand so oder so vil gelts bracht / so wurd sichs wol schicken. Aber doch streht solches bey mir. So thut man dis: in vilen hendeln brauchen für ein exception. Agr. 3 49. Euch cent. 2. 1.**

**¶ So doch/sintemal/dierweil/siquidem, coninu. causaliz.**

**¶ Doch so/wo doch/aberdoch/jedoch/attamen, veruntamen.**

**¶ Wo nicht in gleichem/jedoch angensem / si non pariat**

**40. grato tamen munere.**

**¶ Aberdoch tröste vnd stercke ich mich/difficile est, veruntamen me confirmo.**

**¶ Aber doch mit dem allem Sextius, xxiij. Atqui ne ex eo quidem tempore id egit Sextius, pro Sext.**

**Р н а. Erdencke doch /oder zum wenigsten etwas. Nihil potes dicere: sage saltrem aliquid, Cic. Saltrem coniunctio aduersatiua. Idem interdum significat quod tamen.**

**¶ Wo doch: ubinam, & ubinam gentium, vim habet augendi. O dij immortales, ubi nam gentium sumus!**

**50. P r. Ein armer vermag offit vil kunst / die doch veracht wirt vmb seiner armut willen.**

**¶ Ist nicht gut gemacht / so ist doch gut gedacht.**

**¶ Nem ein armer ins Schlawaffen land / so wer er doch arm.**

**¶ Bebe ich nicht / so gönne ich doch.**

**¶ Leugt man doch wol vbers ander hauf.**

**¶ Mancher strafft an einem andern / das er doch selbst nicht laßt.**

**¶ Wer gleich vil kan / soll doch mit fernem nit ablahn.**

**60. Wirt im Lateinischen offit aufgelassen.**

**¶ So sich jemand laßt duncken /er sey etwas / so er doch nichts ist /der betreugt sich selbst / Gal. 6. 3. Si quis sibi videtur aliquid, cum nihil sit, ipse se animo fallit.**

ここに記述された doch のニュアンス(恐らくは 16 世紀後半から 17 世紀にかけてのもの)が現代の doch とどう関わるか、にわかには断定し難い。しかし意味を説明するために援用されたラテン語の語彙から察するに、「お願いだから分かってくれ、言わせてもらうが」というようなニュアンスで、自分の主張を強く打ち出そうとする語だと Henisch は doch を説明したいらしい。相手の否定や反論を想定した上での主張、という現代ドイツ語の doch のニュアンスにつながっているのではないかと推測される。

中高ドイツ語の doch は、このようなプロセスが始まる前のもではあるが、【例 1】をみると、この場合に限っては、慎重になりすぎる必要はないように見える。

ベネツケ・ミュラー・ツアルンケの doch の項の I, 1, c, β に bitten や fragen で用いられる場合があると、詳しい意味の記述がないままに紹介してある。相手の反論や否定を抑えて、強くこちらの主張を打ち出すニュアンスの用法が、依頼文・命令文や疑問文から始まりつつあったらしい。【例 1】は反語疑問文で表現することも可能な内容であるように思える。現代ドイツ語の doch へと意味用法が変化していく萌芽とみて良いのではないだろうか。

もう一つ例を見てみよう：

【例 2】

1010

nune gesach ich <b>doch</b> zewâre	Ich habe <b>doch</b> wirklich
noch in noch nie dekeinen man	weder ihn noch sonst irgendeinen Mann je
mit vîntlichen ougen an	feindselig angeschaut
noch engetruoc nie nieman haz:	oder gehaßt.

だって私は本当に  
彼のことだって他のどの男の人のことだって  
敵意をもって見たこともないし  
誰にも憎しみを抱いたことはないのだから。

物語のはじめの部分、トリスタンの父リワリーン **Riwalîn** と母ブランシュフルール **Blancheflur** のなれそめのくだりである。リワリーンに今まで誰にも感じたことのない強い好意を覚えたブランシュフルールが、自分の気持ちにうろたえ、こんなにまで自分を動揺させるリワリーンを憎みさえする。そういう矛盾に満ちた恋の気持ちの起伏を、若い女性の独白で濃密に描く。自問自答という文脈で使われているが、ここの **doch** も現代ドイツ語の **doch** と同じコミュニケーション「場」での議論を想定した意味用法（先ほどと同じ、相手の「否定」を想定した上で、確認・驚き・抗議の気持ちを込めて「肯定」の内容を主張するという用法）で使われているようだ。日本語の口語で「だって～なんだもの」という表現がピッタリと当てはまる場所である。他の部分が現代ドイツ語との大きな差異をみせているので（例えば多重否定表現や、過去形に **ge-**を付けた用法など）、むしろ **doch** がそのまま現代語訳にも移せることの方が奇異にすら感じるほどである。

このように、中高ドイツ語の **doch** と現代ドイツ語の **doch** で、同じ心態詞としての役割を果たしている場合が見られる。

しかし非対称な例ももちろんある。

先ほどの 1010 行以下の【例 2】の 10 行ほど先、千々に乱れるブランシュフルールの内的独白に次のような例が見られる：

【例3】

1023

ich sach dâ manegen man und in.            Ich sah **doch** außêr ihm noch viele Männer.

私はたくさんの男とそして彼とを見たのだ。

ブランシュフルールは、自分がリワリーンに特別の思いを抱くのは、全く自分の心の問題であると思ひ直す。それを自分で理由づけて納得するのがこの一文である。

なるべく直訳にした日本語訳から分かるように、現代語とは違う感覚の表現になっている。「追加」を表す **und** の意味を膨らませていて、全体として意味するところは現代ドイツ語訳に汲んである通り、「彼の他にもたくさんの男を見た、彼だけでなくたくさんの男を見た」ということである。さらに原文の **dâ** は、場所と時間をあらかず副詞としての原義から、文意の関連を表す、直ぐには訳出しがたい「ニュアンス」を表す。その代表的な役割の一つとして、理由や説明を表す文のマーカとなる小辞として働き、現代ドイツ語の理由の従属節を導く従属接続詞 **da** に発展していく前段階にある。ここでは現代ドイツ語の **dabei** のような「軽い逆接」の意味があるようだ。

そこで現代ドイツ語訳では、「だって～なのだから」というニュアンスを表す心態詞 **doch** を使っている。現代ドイツ語では心態詞 **doch** を使う方がこの場合にはふさわしいと判断されたのだ。現代ドイツ語の、理由の接続詞としての **da** には、後述するようにコミュニケーション「場」に関わる含みがあるが、そのようなニュアンスは副詞としての **da** にはもはや失われている。だから現代ドイツ語訳であらためて **doch** を補わなければならなかったのだ。

中高ドイツ語にはない心態詞が、現代ドイツ語訳で補われた例を他に見てみよう：

【例4】

14767

daz mich mîn hêrre Marke	Daß Marke, mein Herr, mich
bewaenet alsô starke	so schwer verdächtigt
durch iuvern willen, hêr Tristan,	Euretwegen, Herr Tristan,
weiz got dâ missetuot er an,	darin hat et, weiß Gott, unrecht,
sô gâr als er erkunnet hât,	zumal er <b>doch</b> genau weiß,
wie mîn herze hin z'iu stât.	Was ich für Euch empfinde.

我が主人のマルケが私のことを  
あなたのせいだとして、トリスタン殿、  
あのようによく疑うなどは、  
マルケ王が間違っていると神もご存じです、

王はあれほどはつきりご存じのはずなのに、  
私の心があなたに対してどのような気持ちを抱いているかを。

有名な「庭園の場」である。夜の庭、いつもの通り泉のほとりで密会をしようとしたトリスタンとイゾルデであったが、怪しんだマルケ王 (Marke) が泉のほとりに立つ木の上に登って、密会の現場を覗こうと目論んでいる。隠れているつもりが、枝の間からマルケ王の顔が下の水面に映ってしまっている。めざとく(間抜けな)マルケ王の姿を認めたイゾルデは、巧みに目でトリスタンに合図してマルケの存在を知らせると、二人で当たり障りのない会話をする芝居を打ち、危機を脱する。

中高ドイツ語の「完全に (gâr) ~であるにもかかわらず」 *sô gâr als*~という、*sô* を使った「逆接」の従属節を、現代ドイツ語の *zumal (doch)* に翻訳した例である。

中高ドイツ語では、「程度」を受ける副詞の *sô*、文意を受ける指示代名詞・代名副詞 *da* を用いて、文意と文意の連関を示そうとしていた。現代ドイツ語の従属接続詞・副詞的接続詞ほど用法が分化・確立していない。いきおい、中高ドイツ語の従属節の用法は多義的になる。

「マルケ王は~であることをよくご存じではありませんか、それなのに」と、聞こえよがしに言うイゾルデの言葉のニュアンスを、「知っているにもかかわらず」と単なる逆接の現代ドイツ語に翻訳するのは片手落ちである。そこで *zumal* を使った。理由を表す従属節を導くのに、*zumal* は特別の位置にある。„*besonders weil*“ と説明されたりするが、単に「理由」を述べるだけでなく、「~という理由があるからなおさらのこと」と主節を強調する。現代ドイツ語でも *zumal* は *zumal da* として用いられることがあり、元来の「付加、追加」を表す語だったのが、理由を表す *da* の意味をも含んでいったものと思われる。

さらに現代ドイツ語の *da* 自身が、同じく理由を表す縦続接続詞 *weil* との関係で、厄介な問題をはらむ。*Weil* が文意と文意の間の論理的な関係を示すのに対して、„*weil ja*“ と同じような意味だと説明されたりする。つまり、理由を導く従属接続詞の *da* は、コミュニケーション「場」での共通認識に訴えかけ、言説の根拠とする「理由」の用法である。こうして接続詞としての *da* が持つニュアンスは、心態詞と同じ次元にある。

中高ドイツ語における含みの多い「逆接」を、追加的理由を表す *zumal* にしたが、まだイゾルデの発言のニュアンス(つまりコミュニケーション「場」との関連)を表しきれない。そこで自然に *doch* が差し込まれたのだと思われる。現代ドイツ語の接続詞には、*zumal* であっても、それほどコミュニケーション「場」との関連を示す意味が薄れているということではないだろうか。

近代ドイツ語の文意と文意の関連を示す「接続」の方法が発達してくる、つまり、精密コードとしての用法が発達してくるに従って、中高ドイツ語の「接続」においてプリミティブに混在していた「文意と文意の関連」と「場に依存した関連」の意味用法が分離され、後者が弱体化するだろう。おかしい言い方になるかもしれないが、「発達した」制限コードとし

での用法が、つまり、まさにニュアンスの部分が。近代ドイツ語は、それを心態詞という形で独立させ、別に発達させていったのではないか。

こういう、それなりにきれいな予想が立ちそうだが、もう一点難しい問題が残っている。最後にその問題に触れておこう。

### 3.

少数であるが、中高ドイツ語と現代ドイツ語の対訳で、次のような例が見られる。すなわち、中高ドイツ語原文には心態詞 **doch** が使われているのに、現代ドイツ語の翻訳においてそれが省かれているという「逆方向」の例である：

#### 【例5】

19512

ich bin **doch** nû vil lange ergeben  
als ungewissen winden.

Ich habe mich nun schon so lange überlassen  
so ungewissen Winden.

それでなくとも私はもう長いこと身を任せてきたではないか  
こんなに定かならぬ風に。

ゴットフリートが未完のまま残したとされるテキストのラスト近くである。「金髪のイゾルデ」との不倫関係がいよいよ露見しかけたのでマルケの宮殿から逃げ出したトリスタンが、容貌も似ており、名前も同じ「白い手のイゾルデ」という女性領主に出会って愛され、「金髪のイゾルデ」ことが忘れられないまま、「白い手のイゾルデ」の気持ちを利用して居候を決め込む自分に嫌気がさす。その悶々とした気持ちの長い独白である。

「金髪のイゾルデ」がもしかして自分を探し出してはくれないだろうか、などと世迷い言を言う。その直後に、何を言っているのだ私は、と反省するが、反省のポイントが現代の読者の期待とずれていて、自分は連絡先も知らせずに放浪してきたから探してもらおうと思っても無理だと言うのである。それが上の引用箇所だ。

中高ドイツ語のテキストにある **doch** は、現代ドイツ語にそのまま移行しても不都合がないように思える。けれども心態詞 **doch** にはここに意外な難しさをみせる。和訳にさりげなく付けておいた「それでなくとも」によって、その問題を示そうとしたつもりである。

相手の「否定」を想定した上で、確認・驚き・抗議の気持ちを込めて「肯定」の内容を主張する、というのが **doch** の意味用法であり、この基本は中高ドイツ語でも現代ドイツ語でも共有されている。これまで取り上げた【例1】から【例4】までで跡づけられるのは、その共通の意味を表す方法が、中高ドイツ語と現代ドイツ語でずれてきた、ということであった。

ここで問題になるのは、その共通の意味から発しているが、中高ドイツ語には存在するが、現代ドイツ語にはないニュアンスである。この微妙な意味の分類項目は、BMZにも大LEXERにも記述された様子がなく、ただ日本語の伊藤他編著『中高ドイツ語小辞典』のみが指摘しているようである。

『中高ドイツ語小辞典』の *doch* の項、副詞の①に、「しかし、いずれにせよ；それでも」と意味が記述され、ニーベルンゲンからの „*doch hât der künec Gunther vil manegen hôhferten man.*“ (Nib.53,4) 「しかし王グンターは多くの尊大な家来を持っているぞ」と、 „*diu doch von sprungen nicht belîben, ir ors mit sporen si bête triben.*“ (Par.37,21) 「二人はただでさえ跳び出そうとしている馬に拍車をくれた」の2例を挙げている。意味の記述のセミコロンの位置にやや疑問があるが、この記述はきわめて重要である。「しかし」という意味に対して、「いずれにせよ；それでも」は特別な派生的意味である。

逆接ではあるのだが、相手の否定を押し返しても主張したい内容について、ただ強調して主張するだけでなく、「それでも、もともと、そもそも、いつでもそうだったのだ」と時間的にもっと長く、広い視野からの妥当性を訴えようとするニュアンスが中高ドイツ語には存在した。そしてそれは、現代ドイツ語で失われたのである。【例5】で、中高ドイツ語の *doch* がその「そもそも、それでも」の意味で使われているため、現代ドイツ語の *doch* では再現できず、*schon* をその代替としたのであろう。

これに関して、同じく次の例も見ておきたい：

#### 【例6】

1964

und als si ir inleite dô  
goteliche haete enpfangen  
und was von opfer gangen  
mit schoenem ingesinde,  
dô was dem cleinen kinde  
der heilige touf bereit,  
durch daz ez sine cristenheit  
in gotes namen enpfinge,  
swie'z ime dar nâch ergienge,  
daz ez **doch** cristen waere.

Und als sie ihrem Wöchnerinnensegen dort  
feierlich empfangen  
und ihren Opfergang beendet hatte  
mit ihrem prächtigen Gefolge,  
da wurde dem kleinen Kinde  
die Heilige Taufe bereitet,  
durch die es sein Christentum  
im Namen Gottes erhalten sollte  
und damit es, wie es ihm auch ergehen möge,  
jedenfalls ein Christ sei.

そして彼女が産褥後の祝福 (inleite) を  
教会で受け、  
着飾ったお供とともに、  
奉納(opfer)を済ませると

そこでその小さな子供に  
洗礼がほどこされた、  
その子がキリスト教を  
神の名によって受け入れるようにと、  
そしてこの後彼に何が起ころうとも  
キリスト教徒であるようにと。

実の父母リワリーンとブランシュフルールを失い、まだ赤子のうちに孤児となってしまったトリスタンを、忠義者のルアール (Rual) 夫妻が引き取り、我が子として育てることにした。ルアールの妻フロレーテ (Floraete) が、トリスタンがまるで自分が生んだ子であるかのように世間を偽ったそのやり方の描写である。

当時の習慣に従い、産後 6 週間の産褥が終わると、そこで初めて母親は新生児を連れて教会に入り、子に幼児洗礼を受けさせることが許される。社会的にまともな人間として第一歩を踏み出すために、絶対不可欠な手続きであった。だからこそ、厳粛なものである。

しかし、いくら亡き主君の、命を狙われている忘れ形見を守るためとはいえ、神も教会も世間も欺いたのである。苦肉の策について、神父に告解した様子もない。幼児洗礼の秘蹟自体は有効であろうが、この場で受けたその他の秘蹟や祝福については大いに疑問のあるところではないかと思う。ゴットフリートの『トリスタン』物語を貫く「虚偽」の主題がもうここに現れる。この子トリスタンは、生まれ落ちて直ぐに「虚偽」の洗礼を受けるのである。

だからこそ、くどのような目的の従属節が続くのだ。「その子がキリスト教を神の名によって受け入れるようにと、そしてこの後彼に何が起ころうともキリスト教徒であるようにと。」この時代の幼児洗礼の描写に、こんなことをわざわざ断る必要は本来なかったはずなのである。この物語の「虚偽」のテーマは、当然キリスト教倫理にまで及ぶ。この子はずっと世間を欺く道を歩んでいくことになる。それでもキリスト教徒であり続ける。皮肉な響きの言葉である。だが、誰に対する皮肉であろうか。虚偽にまみれて生きざるを得ない人間に対する皮肉だろうか。それとも、実現不可能な無理な倫理を押しつけてくる側に対する皮肉だろうか。もちろんゴットフリートはそんなことを明言して尻尾をつかまれるようなまねはしないのである。

中高ドイツ語原文のこの箇所 *doch* は、「いずれにしても、どんな場合でも」という意味で使われている。その意味は現代ドイツ語の *doch* にはない。そこで現代ドイツ語では *jedenfalls* という心態詞に置き換えたのである。

#### 4.

中高ドイツ語が持っていたまだ数少ない、ほとんど *doch* ばかりが活躍する心態詞は、そ

れゆえに意味も現代ドイツ語よりも多かった。それが、別の語に移って、心態詞が増えていった様子がここで推測できるように思う。

そしてまた、心態詞が発達してくるプロセスというのは、近代以降のドイツ語が従属接続詞と従属節の構造を発達させるのと密接に関連しているようである。文意と文意の間のつながりには、それぞれの文の意味の論理的なつながり、という次元の他に、発信者と受信者の関係や発信者と発話内容との関係など、コミュニケーション「場」に関わる次元がある。従属節の近代的な構造が作っていく際に、後者をなるべく排除して「精密コード」としての働きを発達させていった。しかし排除されていく後者、つまり「制限コード」に関わる表現要求は依然として強い。これが心態詞として発達していくのがあらましの流れではないだろうか。中高ドイツ語によく見られ、現代ドイツ語にも残っている、soなどの関連の副詞・接続詞や、代名副詞やその接続詞的用法を使った従属節の作り方はニュアンスに富んでいて、なかなかきれいに分析的に記述できない。ここをもう一度たどり直していくことが、心態詞をよりよく理解するための重要な道筋を開くのではないかと思う。

#### 《参考文献》

Gottfried von Strassburg: Tristan, hrsg. von F.Ranke und R.Krohn, 1980 Stuttgart.

Das Nibelungenlied, hrsg. von K. Bartsch, H.de Boor, S. Grosse, 1997 Stuttgart.

Wolfram von Eschenbach: Parzival, hrsg. von K. Lachmann, W. Spiewok, 1981 Stuttgart.

Georg Henisch: Teütsche Sprach und Weißheit: Thesaurus linguae et sapientiae Germanicae Augsburg 1616.

Elke Hentschel/Harald Weydt: Handbuch der deutschen Grammatik, 4. Aufl. Berlin 2013.

G.F.Benecke/W.Müller/F.Zarncke: Mittelhochdeutsches Wörterbuch, Leipzig 1854/66, Nachdruck Hildesheim 1963.

M.Lexer: Mittelhochdeutsches Handwörterbuch, Leipzig 1872/78, Nachdruck Stuttgart 1970.

J. und W.Grimm: Deutsches Wörterbuch, Leipzig 1854/1960.

伊東泰治、小栗友一、有川貫太郎、馬場勝弥、松浦順子『中高ドイツ語小辞典』同学社、1991年。